

重要業績評価指標（KPI）の現状に係る補足説明

Q1 政策目標別KPIの「企業誘致数」は目標どおりだが、既存企業の倒産や転出という課題が検証に含まれていない。どう考えるか。

A ご指摘のとおり企業誘致数とあわせて既存企業の倒産や転出といった検証も重要な課題と思われませんが、現時点では、民間調査会社のデータを除いて、企業や事業所の年度ごとの倒産・転出等を把握する有効な統計調査がありません。

5年に1度の経済センサスによる事業所数の内容の精査、また工業統計調査による従業員4人以上の製造業事業所数の内容の精査、さらに商工会加盟者数の内容の検討なども考えられますが、今後費用対効果を踏まえたうえで、民間調査会社の数値の活用も含めて検討したいと考えております。

市内全体の企業・事業所の状況の検証を行う観点からも、今後関係団体と連携して実態把握に努めてまいります。

Q2 基本目標別KPIの「市内事業所従業員数」が減少しているのに「市内総生産額」が増加しているのはどうとらえるのか。

A 市内事業所従業員数が減少する一方で、市内総生産額が増加しているのは、一般論として事業所の効率化による生産額の向上も考えられますが、本市の近年の状況は、建設業の生産額の増加が主な要因と思われれます。

特に平成25年度の市内の建設業生産額は約148億円となり、平成24年度72億円と比較し倍増しています。増加した原因の正確な把握できていませんが、公共工事の増加や民間工事の増加が考えられます。

国土交通省の「建設工事受注動態統計調査」でも平成24年度から25年度にかけては、全国的にも、景気回復により民間工事や公共工事の受注工事量も大幅に増加している状況です。

Q3 政策目標別KPIの「上水道普及率」と「道路改良率」の目標値設定の根拠は。

A 上水道のKPIは、主に山川地区の普及率を高めることを想定し目標設定しています。山川地区の上水道普及率は、基準年度（平成26年度）において、49.3%に止まっており、第二次行政改革実施計画においても70%まで高めることを目標としています。また、みやま市水道ビジョン（H21年）では、平成30年度における給水普及率を84.8%としており、それも踏まえたものとしています。

道路構造令の基準に沿った改良済み道路延長の道路総延長に対する割合である道路改良率は、道路台帳のデジタル化により台帳全体の見直しを行ったことなどから、基準年度（H26）55.5%から、平成27年度に52.2%と下がる結果となりました。

道路の改良工事等は、定住促進の観点のほか市民生活に密接に関わることであり出来る限り積極的に推進しています。道路改良率のKPIは、市全体で年間約1%の上昇を目指すことを目標と設定し、引き続き推進していく方針です。

Q4 政策目標別KPIの「全国学力学習状況調査」については、点数が高い方が良いが、結果に一喜一憂するものではないと考える。学校においても調査に向けた練習が行われ、できない子どもの意欲の減退が伺われ先生方も疲弊している。

学力学習状況調査よりも「挑戦力に対する意識」が低下している原因をどう考えているか。

A 全国学力・学習状況調査については、その結果に一喜一憂することなく、みやま市が提唱している総合的な生きる力である「みやまの力」の育成に全力を注いでいきます。しかし、全国規模の指標の一つであるこの調査に対して、児童生徒の本来の力が十分に発揮できるように対応をすることは必要なことであると考えます。

K P I 一覧表、政策名「学校教育の充実」における評価指標「挑戦力に対する意識」は、全国学力量習状況調査の児童生徒質問紙における「難しいことでも失敗を恐れずに挑戦していますか」の問いに、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と答える割合を対象としたものです。27年度は26年度より小学校で10.8ポイント、中学校で7.3ポイント上昇しました。しかし、28年度は、小中いずれも26年度よりは高いものの、小学校で5.9ポイント、中学校で4.5ポイント下がっています。

この調査対象は、その年度の小学6年生と中学3年生であり、全ての子どもの一局面であることは否めません。また、本来、挑戦力のような意欲に関わる能力は、促成できるものではありません。しかし、目標として掲げている以上、市としても目標の31年度までに、漸次上昇の傾向にもっていきたいと考えています。ある校区の教師の指導意識に関する調査で、「難しい課題でも、失敗を恐れず、あきらめずに挑戦できる、追究の場を意識して設定しているか」との問いに、「少しそう思う」が6割弱あったものの、「とてもそう思う」は1割強にとどまっていました。

このことから、29年度から始めた「チャレンジデー」の設定のように、挑戦力を高める場を意識的に設定すること、児童生徒に挑戦の場であることを意識させること、そこでの達成感を味わわせることを積み重ねていくことが必要だと考えます。